戦争終結に関する理論的視座

クリストファー・タック

本論文は、戦争終結に関するいくつかの理論を考察するものである。ある批評家がかつて、「紛争からの脱出よりも紛争への参加の方が総じて容易い」と記しているように、ほとんどの場合、戦争を終結させることは戦争を開始することよりもはるかに難しい[1]。これを実証する事例がいくつかあり、例えば、ドイツは1944年中頃には自国が第二次世界大戦で勝利することはないと認識していたが、翌年5月まで降伏しなかった。また朝鮮戦争は、南北どちらにも決定的な勝利のチャンスがないことが最初の1年で分かっていたにも関わらず、3年間続いた。さらにアフガニスタンでの有志連合による取り組みは2006年時点ですでに破綻を見せ始めていたが、アメリカによる大規模な武力行使は2014年まで続けられた。では一体なぜ戦争終結にこれほど困難が伴うのか。交戦国は戦争こそが自国の利益獲得に繋がると信じて戦争を開始する。逆に言えばクラウゼヴィッツの指摘の通り、戦争開始の目的であった利益よりも戦争が引き起こす損失の方が大きくなった時点で、交戦国は戦争の終結と和平の模索を行うのが合理的なはずである[2]。

しかし本論文で明らかになるように、戦争終結には重大な構造的問題が立ちはだかっており、結果論になるが、止めておくべきだったと思われる時点を超えてもなお武力紛争が続くことが多くなっている。本論文の主軸は、戦争終結が交戦国間のさらなる紛争を回避するための政治的取引であるという考えである[3]。敵対国同士にはそれぞれ、受け入れ可能な和平合意の幅である「交渉空間」がある。すなわち、両者の交渉空間が重なり合えばおのずと平和が訪れるはずなのである[4]。しかしこの展開における合理的な計算は、①戦争は機能しているのか、②実現可能な和平はあるのか、③和平のコストは大きすぎるのか、④戦争は止められるのかという4つの問いにより複雑なものとなっている。本論文ではこれら4つの問いを順に検証し、最後に「根本的な問題は解決しているのか」という5つ目の考察について結論づける。

---

1 William Flavin, “Planning for Conflict Termination and Post Conflict Success,” *Parameters* 33 (Autumn 2003), 95.

2 Carl Von Clausewitz, *On War* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1989), 92.

3 Elisabeth Stanley, *Paths to Peace: Domestic Coalition Shifts, War Termination and the Korean War* (Stanfield, CA: Stanfield University Press, 2009), 8.

4 Ibid.

戦争は機能しているか?

ある意味戦争は、敵対国同士が自国の相対的戦力を見誤ることから始まる。というのも戦争開始時、各国は勝利しようが痛みの少ない敗北を喫しようが、武力紛争によって自国の利益を確保できるだけの戦力を保持しているという自負のもとに戦争を始める。いつも戦闘が実際に始まってから、初めて互いに自国の相対的戦力をより正確に把握するのである。つまり、戦争そのものが物資面の強さ、政治的コミットメント、軍事力といった両陣営の実際の力のバランスに対する認識をより正確なものとするのである。理屈で考えれば、戦争の継続によって生じる結果が両陣営にとって共に明白なものとなった時、戦争は終わりを迎えるはずである[5]。どちらが負けるのかについて両陣営で見通しが立った時、あるいはI・ウィリアム・ザートマンが用いた表現で、戦争の継続がいずれの陣営にも利益をもたらさないことを表す「相互に不利益な膠着状態」に陥っていると双方が認識した時、平和は訪れるはずである。しかし現実には、どちらが勝利を収めるにしても両陣営間で戦況についての情報の交換を行うことは極めて難しい[6]。なぜなら本質的に、戦争が政策の一手段として機能しなくなってきていることが当事者には判断できないことが多いからである。

一つ目の問題は、「この戦争は機能しているのか?」という問いが未来に視点を置いているものであって、肝心なのは結果の予測だということである[7]。問題とは言うまでもなく、未来における戦果の評価は検証不可能だということである[8,9]。戦略家のコリン・S・グレイが「議論の余地はあるものの、趨勢を見極めること自体が大きな問題なのではなく、むしろとらえた趨勢の意味を予測することに問題がある[10]」と述べているように、こうした不確実性

---

5 Branislav L. Slantchev, “The Principle of Convergence in Wartime Negotiations,” *The American Political Science Review*, Vol. 97, No.5 (November 2003), 621; James D. Fearon, “Rationalist Explanations for War,” *International Organization*, Vol. 49, No. 3 (Summer 1995), 379-414.

6 Dan Reiter, *How Wars End* (Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2009), 2-3; I. William Zartman, “The Timing of Peace Initiatives: Hurting Stalemates and Ripe Moments,” in John Darby and Roger MacGinty, (eds.) *Contemporary Peacemaking: Conflict, Peace Processes and Post-War Reconstruction* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2008), 23.

7 Geoffrey Blainey, *The Causes of War* (New York: The Free Press, 1973), 55; Robert Harrison Wagner, “The Causes of Peace,” in Roy Licklider (ed.), *Stopping the Killing: How Civil Wars End* (New York University Press: New York, 1993), 246; Richard Smoke, *War: Controlling Escalation* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1977), 269; Roy Licklider, “Questions and Methods,” in Licklider, *Stopping the Killing*, 15; Paul R. Pillar, *Negotiating Peace: War Termination as a Bargaining Process* (Princeton University Press: New Jersey, 1983), 242.

8 Gordon A. Craig and Alexander L. George, *Force and Statecraft: Diplomatic Problems of Our Time* (Oxford: Oxford University Press, 1995), 234.

9 Smoke, *Controlling Escalation*, 270.

10 Colin S Gray, “Strategic thought for Defence Planners,” *Survival*, Vol. 52, No.3 (June-July 2010), 163

が戦争終結における姿勢から柔軟性を奪うことが多いのである。戦争終結の観点から言えば、交戦国にとっての重要な問題は、自国軍が今後より大きな戦果を挙げられるのかということにある。自国軍が現時点においては優勢であるが、今後の戦況は不利なものになっていくと考える場合、その交戦国には速やかに戦争を終結させたいと願う理由が揃っている。反対に現時点では劣勢であるものの、今後の巻き返しを期待する場合、その交戦国に戦争を終結させたいと願う理由はない。これこそが有志連合が2012年から2014年のアフガニスタンにおいて直面した問題であった。有志連合の大部分が2014年に撤退することが決まっており、有志連合には政治的な合意を急ぐ理由が揃っていた。一方、今後の戦況が有利に好転すると考えていたタリバンでは、2014年を前にして進んで交渉を行う理由は見当たらなかった。加えて戦争では、結末を左右し得る重要かつ予測不能な展開が付きまとうこともある。死がその一例である。1762年のロシア女帝エリザベートの死と、それに伴う親プロイセン派ピョートル3世のロシア皇帝への即位は、窮地に立たされていたフリードリヒ大王を救うことになった。このことから交戦国は、「何かが起きる」と信じ、そして歴史でも「時として何かが起こる」ことが証明されているために戦いに耐え続けるのではないか、とジョン・オルムは指摘している[11,12]。交戦国が逆境の戦いにおいても耐え得るのは、決定的な展開が戦況を好転させてくれるかもしれないという願望の表れゆえである。

二つ目の問題は、戦争の進行具合を測るための尺度に関するものである。つまり、何をもって戦争が機能していると判断するのか、ということである。戦争とは単純なものではなく、より多くを投入すればより大きな結果が得られるわけではない[13]。従って、費やした金額や展開した兵力などのデータを評価することで戦況を判断することはできない。分かりやすい判断基準として死傷率や占領した土地面積を挙げることはできるかもしれないが、ベトナムにおけるアメリカの戦争からも分かるように、戦術的には多くの勝利を得たとしても、戦略的には敗北を喫する可能性もある。従来型の戦争においても、短期間の戦術的な戦いを制することが戦略的な敗北への一歩に繋がることは実際にある。このことは、1941年6月から7月にかけてドイツが手にした初期の対ロシア戦勝利からも明らかである。より複雑で従来とは異なるケースでは、これまでの判断基準はほぼ意味を成さないが、代わりとなる判断基準は数も膨大で議論の余地も残る。こうした基準として、民間人の死傷者数、暴徒の殺害数、防衛部隊の損失幅、武力行使の度合い、学校に通う子どもの数、投票者の

11 John D. Orme, *The Paradox of Peace: Leader, Decisions and Conflict Resolution* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2004), 151.

12 Ibid., 12

13 Colin S. Gray, *Defining and Achieving Decisive Victory*, (US Army War College, Carlisle: Strategic Studies Institute, 2002), 14-17; Scott Sigmund Gartner, *Strategic Assessment in War* (New Haven: Yale University Press: 1997), 8.

登録数、地元の人口、それとも何か他の指標を利用するのが良いのだろうか[14]。

しかし、問題は他にもある。戦況を判断するためには、交戦国が自国の戦いの目的に対して明確な考えを保持している必要がある。にもかかわらず、国家（あるいはその他の政治的アクター）が目標を設定していないことも多く、その目標は公表されず、空中分解し、判断の正確性に欠け、あるいは非現実的で戦争期間中に変化していくものでもある[15]。例えば、敗戦までのプロセス自体を勝利の一形態にするという方法で戦争の目的を解釈することができる。1918年までにドイツのヒンデンブルク陸軍元帥がドイツの目標を「降伏の回避」に軌道修正していたのが一例である。ヒンデンブルクは、長期的に見て連合国と政治的取引をするよりも降伏する方がドイツという国家の根幹に与えるダメージは大きくなると考えた。「もし敗北を喫するとしても、降伏は避けねばならない。問うべきは、ドイツ民族は言葉と行動のすべてにおいて一人残らず名誉のために戦い、それによって新たな生存の可能性を死守することを厭わないだろうか、ということである」とヒンデンブルクは述べている[16]。

別の問題点は、戦争が機能しているかどうかの判断基準となる客観的な情報が不足している場合、どうしても個人や組織の偏見から生まれる「信念」を以って欠落した情報を補おうとすることである[17]。政策決定者が戦況の判断を行う時、公式・非公式の権力構造、標準的な運用手続き、影響力のヒエラルキー、そして人間が解釈を行う上での様々な偏見は、多大なる影響を及ぼし得る[18]。例えば、個人は解釈の不一致を回避したいという気持ちから行動することが多く、新たな情報を作り出して既存の考えに合わせようとする向きがある[19]。意思決定では、情報を無視したり支配的な統一見解に合わせようと解釈のやり直しを行ったりする「集団心理」の影響を受けることがある[20]。最後に、戦争が機能しているかどうか

---

14 Anthony H. Cordesman, *The Missing Metrics of "Progress" in Afghanistan (and Pakistan)* (Center for Strategic and International Studies, November 14, 2007), 5, http://aix1.uottawa.ca/~rparis/Cordesman_paper.pdf <Accessed 26/7/2011> ; *The Afghan-Pakistan War: A Status Report, 2009* (Center for Strategic and International Studies, June 18, 2009), 4-18; *Analyzing the Afghan-Pakistan War* (Center for Strategic and International Studies, 28 July, 2008), 6.

15 Robert Mandel, *The Meaning of Military Victory* (Boulder, CO: Lynne Rienner, 2006) 等を参照。

16 Fred Charles Ikle, *Every War Must End* (New York: Columbia University Press, 1971), 101.

17 Smoke, *Controlling Escalation*, 269; Branislav Slantchev, "How Initiators Win Their Wars: The Duration of Warfare and the Terms of Peace," *American Journal of Political Science*, Vol. 48, No. 4 (October 2004). 815.

18 Paul K. Davis, "Behavioural Factors in Terminating Superpower War," in Stephen J. Cimbala, and Sidney R. Waldman, *Controlling and Ending Conflict: Issues Before and After the Cold War.* New York: Greenwood Press, 1992*),* 175; See also Graham Allison and Philip Zelikow, *Essence of Decision: Explaining the Cuban Missile Crisis* (New York: Longman, 1999).

19 Orme, *Paradox of Peace*, 11.

20 Irving L. Janis, *Groupthink (*Boston: Houghton Mifflin, 1982), 35-47; Gartner*, Strategic Assessment*, 43.

の計算は、戦争の相関的性質という避けられない論理によってなされる。戦争終結に必要なのは、両陣営が紛争の結果の展望に関して共通した認識を持つことである。しかし、戦争とは独自の価値観に沿った思考・反応・適応を行う敵を相手とした動的な戦いである。一方が全く異なった基準に沿って戦況を判断すれば、結果として両者共に勝利を確信することもある[21]。あるいは相手が従来の戦略から新たな戦略への転換を図るといった、これまで考えられていた勝利の判断基準を完全に覆す行動に出ることもある[22]。また敵を撃破していく戦いの中、敵対国はあらゆる手段を講じて戦闘への献身ぶりを誇張し、目に見えて明らかな損失を最小限に見せかけ、戦争終結を模索している印象を与えないよう努める[23]。そのため、いつ交戦国間で戦争結果に関する見解が実際に一致するのかを知ることは難しい[24]。

戦争結果に関する認識の一致は、和平の前提条件である。しかし、各自が定めた目的、用いる判断基準、情報の選別が行われた価値観、今後の展開に対する考えによっては、こうした意見の一致が見られるまでに時間を要することがある。C・M・R・ミッチェルは、戦争開始当初の交戦国に、「負けるという発想はほとんどない」と記している[25]。

実現可能な和平はあるのか?

たとえ交戦国の一方が自国の目的達成手段としての戦争がもはや機能していないと判断しても、交渉空間での一致を生み出すには両陣営に受け入れ可能な政治的解決の幅が必要であるということが、戦争終結をより一層難しいものにしている。言い方を変えれば、戦争終結には両陣営が共に実現可能な和平が存在していると確信することも条件となる[26]。戦争

21 Gartner, *Strategic Assessment*, 26; Pillar, *Negotiating Peace*, 59.

22 22 I. William Zartman, "Unfinished Agenda: Negotiating Internal Conflicts," in Licklider, *Stopping the Killing*, 25-27; Jane E. Holl, "When War Doesn't Work: Understanding the Relationship Between the Battlefield and the Negotiating Table," in Licklider, *Stopping the Killing*, 279-280.

23 H. E. Goemans, *War and Punishment: The Causes of War Termination and the First World War* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 2000), 29.

24 Pillar, *Negotiating Peace,* 67-68; Michael Codner, *The Implications of War Termination Considerations for the Operational Commander*, Operations Department (Newport, RI: US Naval War College, March 1991), 5.

25 Goemans, *War and Punishment*, 31; C. R. Mitchell, *The Structure of International Conflict* (Basingstoke: Macmillan, 1989), 174.

26 Orme, *Paradox of Peace*, 149; Goemans, *War and Punishment*, 35; Bruce B. G. Clarke, "Conflict Termination: A Rational Model," *Studies in Conflict and Terrorism*, Vol. 16, No. 1 (1993), 30; Adrian Guelke, "Negotiation and Peace Processes," in John Darby and Roger MacGinty, (eds.) *Contemporary Peacemaking: Conflict, Peace Processes and Post-War Reconstruction* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2008), 63.

中はこうした状況に影響を及ぼす以下3つの障害が立ちはだかることが多い。

一つ目の障害は、両陣営が追及する目的の性質である。和平の実現には、両陣営共に実現可能で両立できる最小限の戦争目的を持たなければならない[27]。戦争が価値観の対立によるものであれば、和平の実現には困難が予想される。価値観の対立による戦争とは、その目的が多分にイデオロギーに基づくものであったり、無形のものであったり、信仰心に根差したものであったりする戦争を指す。この種の戦争はゼロサムの性質を有することが多く、戦争のコストは二の次で、目標達成を重視する立場を貫く可能性が高い[28]。その対極にあるものが、戦争の原因が土地や資源といった有形のものである戦争である。こうした戦争は、価値観の対立による戦争に比べると政治的な解決が比較的容易である[29]。価値観の対立による戦争は全面戦争または内戦に結び付くことが多く、その中で交戦国は本質的であると確信する戦いに従事するのである。しかし強い価値観に基づいたダイナミクスは、しばしば政府や政策決定者による意図的なレトリック戦略の結果として、紛争の中で様々な形を取って現れ得る。こうした理由から、本来は懸案事項を核として始まった戦争が、時間の経過と共にむしろ価値観の対立による戦争へと変化することがある。歴史や国家の面目という観点から象徴的重要性にレトリック的な焦点をあてることによって、領土など有形のものに価値にもとづく性格が浸み込むことがある。犠牲が価値を生み出すと言えるのは、戦争による損失が大きければ大きいほど、社会はその損失に価値を与え、戦争からより多くの政治的成果を得ようとするためである。また、戦時中は社会の士気を高揚させることを目的に、政治家らは紛争における価値の側面を強調し、激闘の様子を大げさに伝え、敵を悪者に仕立て上げる他、敗北側の損失幅をかさ増しするといったことを意図的に行う場合がある[30]。このような状況下では、政治的な妥協に向けた動きはいとも簡単に非愛国的で

27 Gray, *Defining and Achieving Decisive Victory*, 13; Bruce Bueno de Mesquita and David Lalman, *War and Reason: Domestic and International Imperatives* (New Haven: Yale University Press, 1992), 14.

28 Holl, “When War Doesn’t Work,” 277; Pillar, *Negotiating Peace*, 169-172; Adrian Guelke, “Negotiation and Peace Processes” in Darby and MacGinty, (Eds.) *Contemporary Peacemaking,* 67-68.

29 Nathalie J Frensley, “Ratification Processes and Conflict Termination,” *Journal of Peace Research*, Vol. 35, No. 2 (March 1998), 172; Michael Rampy, ‘The Endgame: Conflict Termination and Post-Conflict Activities,” *Military Review* (October 1992): 48; Berenice A. Carroll, “War Termination and Conflict Theory: Value Premises, Theories, and Policies” in *How Wars End: The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 392 (November 1970), 18 and 30; Robert F. Randle, *The Origins of Peace: A Study of Peacemaking and the Structure of Peace Settlements* (London: Collier-Macmillan, 1973), 11-12; Ikle, *Every War Must End*, 83; Chaim Kaufmann, “Possible and Impossible Solutions to Ethnic Civil Wars,” *International Security*, Vol. 20, No. 4 (Spring 1996), 136-175; I. William Zartman, “Dynamics and Constraints in Negotiations in Civil Wars,” in I. William Zartman (ed.), *Elusive Peace: Negotiating an End to Civil War* (Washington DC: Brookings Institution, 1995), 3-29.

30 Robert Harrison Wagner, “The Causes of Peace,” in Licklider, *Stopping the Killing*, 257; Ikle, *Every War Must End*, 107; Guelke, “Negotiation and Peace Processes,” 68-69.

時には背信的な行為とすらされる[31]。例えば、1992年から1995年までのボスニア･ヘルツェゴビナ紛争では、政治的企業家やメディアの一部により、歴史認識、ユーゴスラビア時代の遺産への不満、激しい民族主義闘争の結果作り出された従来の共有されたアイデンティティに対して意図的な操作が加えられ、暴力の連鎖を通じて激化された[32]。

二つ目の障害は、交戦国間に信頼関係が存在しないということである。交戦国の一方が交渉を望んだとしても、相手は敵が申し入れてきた交渉の開始が言葉通りのものであると信用できない場合もある。相手側が誠実な態度で交渉に臨まないかもしれない戦術的理由は多くある。具体的には、単に相手の出方を伺っている場合、交渉を提案することで自分たちが対等な交渉相手であるという証しを得ようとしている場合、交渉入りが単に国内及び国際社会の世論を形成する一手段である場合、相手側に責任を押し付ける形で会談を決裂させることを狙って交渉開始を考えている場合などである[33]。仮に相手側が政治的合意を真に望んでいると確信が持てたとしても、相手側がその政治的合意に従うことが考えづらい場合がある。特に劣勢側では「信頼できるコミットメント」ということが問題となり、和平を望んではいるものの、はたして相手側がその和平に従うのかという疑問が拭えないことがある。こうした状況では、劣勢側が戦争続行よりも和平合意によりもっと不利な状況に追い込まれるだろうと考えるのは想像に難くない。交戦国間で以前にも政治的解決が失敗した歴史がある場合、特に大きな問題となる[34]。こうしたことが現在ロシアとウクライナの対立を解決に導こうとする取り組みを揺るがす問題の一つとなっている。

最後の問題は第三者の存在である。第三者は、前述の2つの問題を解決する上でしばしば重要な役割を果たす。仲介努力は効果が期待できる対話のパイプラインを構築し、新たな政治的選択肢を揃える後押しとなる他、目下の外交の行き詰まりを解消してくれる場合もある。また第三者は、中立的な立場から監督・監視・和平合意の保証を行い、政治的・経済的・軍事的な「飴と鞭」を繰り出して交戦国に締結した合意内容の遵守を促すことで、和平合意の確実な履行という難問解決に対する貢献を行うことがある。しかし、武力紛争の当事者双方で受け入れ可能な第三者が見つからないおそれもある。当然この場合の仲介はより困難を極め、和平合意の確実な履行の難しさはさらに深刻さを増すと考えられる。

31 Smoke, *Controlling Escalation*. 264.

32 Neven Andjelic, *Bosnia Herzegovina: The End of a Legacy* (London: Frank Cass, 2003) 等を参照。

33 Allen E. Goodman and Sandra Clemens Boggart, *Making Peace: The United States and Conflict Resolution* (Boulder, CO: Westview, 1992), 7; Pillar, *Negotiating Peace*, 67-68; William T. R. Fox, “The Causes of Peace and Conditions of War,” in *How Wars End*, 12.

34 Jon Hovi, *Games, Threats and Treaties: Understanding Commitments in International Relations* (London: Pinter, 1998), 103-111; Guelke, “Negotiation and Peace Processes,” 76.

和平のコストは大きすぎるのか?

どちらか一方の陣営が戦争が機能していないと判断し、現実的な政治的合意の余地がいくらかあると考えられても、戦争終結までに克服しなければならない課題は依然として残っている。問題を内包する課題の一つに和平のコストがあり、これは二種類に大別することができる。

一つ目のコストは、交戦国と他の国家間の政治的関係に戦争終結が及ぼす影響である。分かりやすい例が国際社会における信頼性である。戦争は往々にして潜在的な関心を呼び起こすが、政治的アクターは、自己が他者からどのように見られているかに非常に大きな関心を寄せる。交戦国は、和平合意を模索することが自国の信頼性・決意・コミットメントを弱いものに見せると考え、その他の敵対者は増長し、同盟国との関係も揺らぎ、別の地域で進める抑止や強制も弱体化するだろうという発想から、勝算が極めて低い場合においても敢えて戦い続けることが多いのである[35]。この論理はとりわけ致命的になるおそれがある。なぜなら、戦争が長引くほど、戦いのコストがかさみ、交渉による戦争終結を模索することで自国の信頼性が一層危うくなりそうだからである。

二つ目の代償は国内的なもので、交戦国の中で開戦の決定に関わった当事者集団に降りかかるものである。エリートは、時として自分たちが率いる政治集団とは異なる利益を持っていることがある。特に権力の維持や自己保身は、戦争終結の必要性にも勝る強力で生気ある利益である[36]。敗戦を認めることは、指導者にとっては様々なコストが生じる可能性があることを意味する。これらのコストには個人の自己評価や自信に対する一撃といった心理的なものもあれば、選挙での落選やクーデターによる失脚で権力を失うといった政治的なものもある。その政権の性質によっては、敗戦のコストは指導者にとっての物理的な意味での終焉となる[37]。仮に指導者が戦争終結にコミットしている場合でも、自分たちの面目が保たれるという保証がない限り、戦争終結を渋る可能性もある。また指導者は、その先により良い和平取引があると期待しながら戦争継続を選ぶのかもしれない。例えば、リチャード・ニクソン大統領はベトナム戦争の終結を国民に約束したこともあって選挙に勝利したが、「名誉ある和平」と受け止められる合意を導き出すまで戦争を止めなかった。

さらに悪いことに、交戦国は往々にして自らが作り出したレトリックの犠牲者となり得る。国内の士気高揚を図る中、指導者なら勝利を国民に向けて約束したこともあるだろう。敗

35 Pillar, *Negotiating Peace,* 65-66.

36 Elisabeth Stanley, *Paths to Peace: Domestic Coalition Shifts, War Termination and the Korean War* (Stanfield, CA: Stanfield University Press, 2009), 10.

37 Ibid., 8-9; John A. Vasquez, *The War Puzzle Revisited* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009), 233; Orme, *Paradox of Peace*, 3; Goemans, *War and Punishment*, 13-14.

戦のコストはこの世の終わりであると言ったかもしれない。敵とは一切の交渉に応じないと言明したのではなかろうか。このような場合、完全勝利以外の結果を受け入れることによる自国の信頼性失墜及び国内において指導者が支払うコストは格段に大きくなると考えられる[38]。このような理由から、戦争終結には交戦国の少なくとも一方で政権交代が必要なことが多く、実際、結果的に政権交代が起こることも珍しくない[39]。

つまり突き詰めると、交戦国が戦争終結を拒むのは必ずしも勝利を確信してのことではなく、敗戦で生じるコストの支払いを回避するためなのかもしれない。

戦争は止められるのか?

だが、交戦国の指導部が敗戦あるいは完全勝利を達成できなかったことによるコストが許容できるものだという結論を出すとしても、戦争終結には解決しなければならないもう一つ別の問題が残っている。その問題とは、指導部が主要な支持基盤からこの決定に対して支持を取り付けなければならないことである。これは依存性の問題の一つで、ある政治的アクターの他の政治的アクターに対する依存度や交戦国指導部による権力行使時の国内支持基盤に対する依存度に関係している。依存度が高ければ戦争終結の決定で他者の同意を得る必要があり、戦争終結はより困難となる。

国際的には、戦争終結の決定では、「戦争を志向するアクター」すなわち戦争において死活的利益を持つアクターの同意が必要な場合がある。これらのアクターには交戦国の同盟国、大国、地域アクター、その他が挙げられる。これらのアクターは戦争のコストを増大させるように影響力を行使して戦争終結を促すことがある。例えば、1956年のスエズ危機において英国が軍事作戦を中断させた一つの主な理由は、アメリカからの圧力であった。反対に、直接の利益を得られるため、あるいは戦争終結の圧力をかけると国内的なコストが大きすぎるため、戦争の継続あるいは少なくとも戦争終結に関して干渉しないことで利益を得られることもある同盟国に交戦国が頼る場合もある。多くの戦争志向のアクターが存在する複雑な紛争においては、戦争終結の決定はおのずと国レベルではなく国際的なものとなり得る[40]。例えば、1943年に連合国に降伏しようとしたイタリアの試みは、これを許さなかったドイツによって事実上なかったことにされた。2014年のアフガニスタン紛争の終結及び終結時期の決定は、両陣営の有志連合の存在やパキスタンなどの地域アクターが

38 Bruce Bueno de Mesquita, Alistair Smith, Randolph M. Siverson, and James D. Morrow, *The Logic of Political Survival* (Cambridge, MA: MIT Press, 2005) を参照。

39 Stanley, *Paths to Peace*, 7-11.

40 Holl, “When War Doesn’t Work,” 287; Ikle, *Every War Must End*, 62-64; Randle, *The Origins of Peace*, 15.

担った重要な役割によって複雑化した。

国内的には、フレッド・イクレが「国内の政治闘争は戦争終結時に懸案となる全ての事柄に悪影響をもたらす」と主張していることからも、戦争終結には困難が伴う[41]。戦争終結の決定は、社会にとって極めて大きなトラウマとなりかねない。戦争のコスト、戦争が引き起こし得る政治的分裂を考える場合、完全勝利を達成しないまま戦争を終結させるべきかという議論では大きく意見が分かれることもしばしばで、タカ派とハト派との激しい議論や時には暴力を伴うこともある[42]。独裁国の指導者も含むほぼ全ての指導者が、権力の座を維持するため、政党、有権者、メディア、軍部、寡頭政治支配者、軍閥の長など何らかの支持基盤に依存している[43]。政治学者エリザベス･スタンリーの主張はこうだ。「連合が国家のほぼ全ての決断や行動の屋台骨を形成している。すなわち、人間の行動を『政治的』なものにしているのが連合である。全指導者は増税から戦争終結に至るまで、何らかの成果を挙げるために連合を組み維持していかなければならない[44]。」こうした支持基盤への依存度が低い指導者の場合、戦争終結の決定においてより強い自主性を発揮する。しかしこの強い自主性は諸刃の剣にもなる。サダム・フセインの比較的強い自主性は、他の支持基盤の反対の声を無視して1991年に湾岸戦争を終結させたが、アドルフ・ヒトラーのそれは、ドイツ国内の反対派の意見に反して、第二次世界大戦をだらだらと長引かせた。こうしたことから、戦争終結に伴う困難は、指導者の国内での弱点や自らの重要支持基盤を統率する能力の欠如の現れである可能性もあり、また国内の支持基盤が渋る指導者に対して効果的な影響力を発揮できていないことが原因と言えるのかもしれない。政体の種類によって戦争終結の決定における困難の度合いに違いがあるのかといった議論もある。民主主義国家が当事者である戦争は短期間で終息する傾向にあるが、その理由はそもそも民主主義国家が短期間で決着が着くと考えられる戦争に参戦することが多いからとも考えられる[45]。ゴエマンズは、部分的に民主主義が混ざった「混合」政体は、民主主義政体や独裁政体の

41 Ikle, *Every War Must End*, 84; Roy Licklider, “How Civil Wars End: Preliminary Results From a Comparative Project,” Cimbala and Waldman, *Controlling and Ending Conflict, 224*; Stanley, *Paths to Peace*, 287; Dennis M. Drew and Donald M. Snow, *Making Strategy: An Introduction to National Security Processes and Problems* (Maxwell Airforce Base, AL: Air University Press, 1988), 43; James C. Gaston (ed.), *Grand Strategy and the Decisionmaking Process* (Washington DC: National Defence University, 1992); Richard Rosecrance and Arthur A. Stein, “Beyond Realism: The Study of Grand Strategy,” in Richard Rosecrance and Arthur A. Stein (eds.), *The Domestic Bases of Grand Strategy* (Ithaca, New York: Cornell University Press, 1993), 12.

42 Vasquez, *The War Puzzle*, 225; Frensley “Ratification Processes,” 171; Mitchell, *The Structure of International Conflict*, 188; Ikle, *Every War Must End*, 62.

43 Bueno de Mesquita, et al, *The Logic of Political Survival*, 8; Stanley, *Paths to Peace*, 30-31.

44 Stanley, *Paths to Peace*, 28.

45 Ibid., 32.

いずれよりも戦争終結において消極的になるおそれがあると指摘する。理由の一つとして、政治指導者にとっての敗戦の結果がより厳しいものになることを挙げている[46]。

根本的な問題は解決しているのか?

以上の考察から明らかなのは、なぜ歴史的に見ても戦争終結がこれほど難しいものであり続けるのかという理由である。しかし最後に一考されるべき疑問点がもう一つある。戦争が終わりを迎え、なおかつそこに公式の和平合意があったとしても、それが衝突の発端となった政治的対立が完全に解決したことには必ずしもならない。別の言葉で言い換えれば、紛争の終結と解決の間には壁があるということだ。これが「戦争の終わりをどう定義するのか」という問いかけに繋がる以上、単なる意味論だけの問題ではない。

第一次世界大戦終結の理由が論じられることがある。しかし、歴史家E・H・カーにとっては第一次世界大戦の終わりは第二次世界大戦の始まりと密接に関連しており、二つが組み合わさって20年続く一つの危機を構成してい[47]。同じ文脈で、1967年の六日戦争（第三次中東戦争）あるいは1973年のヨム・キプール／ラマダン戦争（第四次中東戦争）の終結の理由について考えることもできるが、どちらの戦争の根底にも今日まで続くアラブ対イスラエルの深い溝がはっきりと見て取れ、戦争自体は終わりを迎えたものの、多くの交戦国間に残された政治的対立は今も解消されないままとなっている。こうしたことは今に始まったことではない。例えば、百年戦争と呼ばれる対立は、個々に独立した衝突の連続であったが、水面下ではそれらは似たような性質の要素により繋がっており、一つの衝突の終わりは次の衝突までの束の間の休息でしかなかった。ラムズボザムらは、「紛争の解決と暴力的対立の終わりにおける結び付きは必ずしも直接的に繋がっていない。紛争の根本的要因は、その要因そのものに働きかける戦争や和平合意なくしてはずっと残り続ける」と指摘している[48]。従って、戦争が終わりを迎えたとしても、それは次の戦争が始まるまでの単なる空白期間に過ぎないのかもしれない。こうしたことから、英国の兵士であり戦略家であったバジル・リデル＝ハートは次のような言葉を残している。「どのような和平を望んでいるのかを常に考えながら戦争を行うことが必要だ。戦争からその後続く和平に至る長期に渡る政策について、常に頭に留めておかなければならない[49]。」

46 Goemans, *War and Punishment*, 50-52; Reiter, *How Wars End*, 19-20.

47 E. H. Carr, *The Twenty Years' Crisis* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2001).

48 Oliver Ramsbotham, Tom Woodhouse, & Hugh Miall, *Contemporary Conflict Resolution* (Cambridge: Polity, 2008), 159.

49 Basil Liddell Hart, *Strategy* (London: Meridian, 1991), 338.

戦争の終結と解決の間にある壁は、戦争の終わりにおける「どう見るのか」という難しい問題にも繋がる。つまり、戦争が終わった時、戦争は誰にとっても終結したことになるのか。例えば、欧米諸国にとってのイラク戦争終結は、大部分の戦闘部隊がイラクから引き揚げ、多くの国が完全撤退した2009年と言えるが、その時点でイラクの平和は回復されておらず、多くのイラク人からすれば現在の対 ISIS 戦は新しい戦争ではなく、単に2003年から2009年の戦闘が形を変えているだけである。戦争が終わったように見えたとしても実際は一時的な休止に過ぎず、ただ別の形で継続され得る点が戦争の終わりにおけるもう一つの問題である。

結論

合理的には戦争は両陣営の交渉空間が重なったところで終わりを迎えるはずである。つまり、少なくとも交戦国のどちらか一方が、戦争から得られる利益を戦争による損失が上回ってしまったと判断する状況である。しかし実際には、戦争終結に関する計算には高い不確実性が付きまとう。多くの場合、交戦国は自国の戦いぶりを知る判断材料となる客観的かつ明白な情報を有しておらず、もし情報が手元にあったとしても、今後は戦況が好転するだろうという楽観的な意識が常にある。仮に指導者が自国軍の軍事的状況が悪化していることを認めることがあっても、和平の実現には交戦国双方で信頼できる政治的合意の形成が可能であるという確信を持つ必要がある。しかし対立が価値観に基づいた複雑なものである場合、妥当な和平合意を描くことは難しく、その実現には困難が伴う。加えて指導者が自国、自らが属する集団、あるいは自身が支払うことになる広範囲に渡る敗戦のコストを恐れ、戦争を継続する可能性もある。指導者が和平の実現を望んでも、その支持基盤も同じ結果を望むとは限らない。

戦争の終結は長く混乱したプロセスである。事実、戦争終結に伴う問題は特別なものでも過去のものでもなく、必ずしも誤った戦略や戦略的思考の欠如により発生するというわけでもない。要するにこうした問題には、どのような容易な解決策もほとんど当てはまらない普遍的で構造的な難しさがあるのだ。